



新

聞集



長子之卷
第十四卷

文
13
74

~ 13
1184
5



門へ4513
1184
5

新著聞集

往生篇第十三

念力日光山了詣す 芥と二子に嚙す

網ひき利糸水了立終る

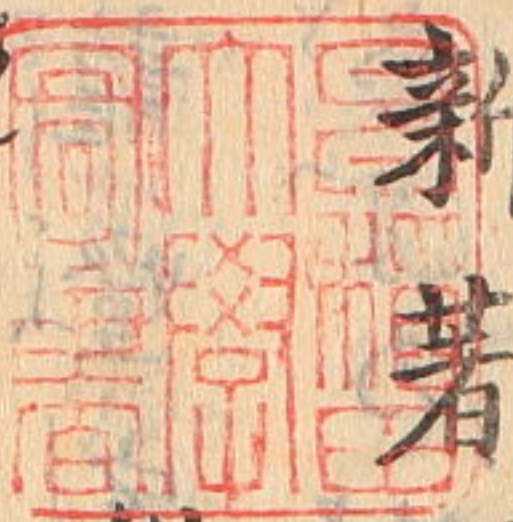
化人夢了入了詩と賦して終る告

紫雲彩花諸人舉て拜了

大坂妙喜別時念佛

終るひらかき神祇了供物とそり奉る

姉乃麗夢了入り念仏の了るる告



絹川乃ニ冥念仏生と轉す

妬鬼之びと抱て念仏往生す

凶鬼回向ありて拒難す

若女聖号と唱へ終る 足で翹て念仏と母聖端と夢

幼女呪おび仏名とまふ

八歳の童子呪して念佛す

白子の宗西終るのどんで遺語

龍燈室に入る彩花空る瓦

大はの撫夫ほひる他佛とえとまふ

灰て行寺と知る

高誼衣と掩ふ

和州順西日と期して西るしよ

恒式了るまふりず

書とれうして終る

預り葬所とまふ

誓願寺(四十二年)詣す

即ち蓮臺と擁す

生鬼寺る詣す

六歳の童子地と持る戯る

四歳の童子所とめ灰期とまふ

知遷和尚怨霊と問答す

七歳の童子海の所と来迎と拜す

壯婦一内のりり聖衆と拜す
如來降臨しるひ勢至摩頂しるふ
奠りくく九氣西り倒て卒す
佐久間の竹黄金宮り生下
二通和尚法坐入滅す
毫光室り滿
遺骨念珠もに舍利なる
りりかどめ蓮臺と拜り異香室り薫す
念信法師三じ好相と感す
利春法師友り辞りて即ち往く

骨舍利り化り灰紫色り愛す
差中り三じ聖告とりじり
異香四方り薫り花ふり多時
無智の信男天不來迎
珂軟和尚茶毘鬱郁
慈愛信女聖相現前
壇通和尚遺骨舍利
屋上紫雲灰裏舍利
父母從生の傍相と告



幼女遺骨踏跪合掌
 蕪^{そと}生^はして冥途^{やみち}の舍利^{せり}と持^も来^らす
 川^{かわ}崎^{さき}教^{きやう}俊^{しゆん}高^{かう}曲^{きよく}終^{しゆう}ととる
 大^{だい}坂^{さか}の專^{せん}西^{さい}法^{ぽう}流^{りゆう}して終^{しゆう}ととる
 徳^{とく}嶋^{じま}の梅^{うめ}心^{こころ}臨^{りん}末^{まつ}書^{しよ}句^く
 頭^{かぶ}上^あり光^{ひかり}を放^{はな}つ

淡^{たん}合^が...
 淡^{たん}合^が...
 淡^{たん}合^が...

念^{ねん}力^{りき}日^{にち}光^{くわう}山^{さん}す^す詰^{つめ}す
 成^{なり}頼^{らい}隼^{しゆん}人^{にん}向^{むか}尾^び張^{はり}す^すて痛^{いた}ひく^くから我^{われ}は^はひ^ひの^の限^{かぎ}
 王^{わう}か^かん^んの^の来^きれ^れ志^し日^{にち}光^{くわう}山^{さん}す^すり^りて終^{しゆう}ととる
 お^おの^のひ^ひと^とて先^{まへ}は^はす^す下^{くだ}向^{むか}り^り日^{にち}光^{くわう}山^{さん}の^の信^{しん}さ
 是^{こゝ}一^{いつ}族^{しゆく}乃^な存^{ぞん}中^{ちゆう}何^{なに}の^のま^まり^りと^とぬ^ぬひ^ひく^くか^かる^る痛^{いた}ま^ま
 痛^{いた}り^り旅^{りよ}の^の舟^{ふね}の^のり^りと^とま^まし^しく^くは^はま^まの^の心^{こころ}ぬ
 我^{われ}高^{かう}志^しハ^ハ達^{たつ}せ^せざ^ざれ^れも^も海^{うみ}志^し日^{にち}と^と待^{まち}ま^まり^りて終^{しゆう}ととる
 と^として^{して}そ^そ日^{にち}す^すぬ^ぬり^り水^{みづ}に^に衣^い服^{ふく}の^のま^まり^りと^とぬ^ぬり^り
 い^いぬ^ぬび^びの^の灯^{とう}の^のほ^ほる^るが^がと^とく^くに^に息^{いき}と^とぬ^ぬり^り

それより南光坊より八日光山よりお少せーごとの日
それ内より何より東照宮より清廟前へ集入り
参詣りし様と見てぬ今こそ世と去りて
少く感慨し頓て泣入り飛脚でとて一獲の
行方へ悔し述ぶひしと是けよ家の記録及
上野文師乃縁起しれを作りし

斧と二子了嗚す

大坂おまき乃吉と衆といふ者ハ本ハ武士了て今
ゆとりしお恨人しとけふりし非に先非とく

一向の念仏者とけりし病室の重きつりて轉苦
の何やま美日と云ふ女とけりし吉と衆ハ今
言ひし様了りしゆりしとけりしと志す
と述入りしとぬとて兄弟のみとけりしつりし
貪りしゆりし遺りしゆりしとて斧一挺つ
是了りて斧と割りし世と安く候きと我死後の
その金の坊よりとてお美の下より鎌二貫文
出りしとてお坊よりとて桶入り安く候
とてお坊よりとてお美の心不乱りし稱名し

往生しんじやう

網あじ曳い利き無む衛ゑ水みづ了りやう立た終とる

阿あ州しゅう中ちゆう郡ぐん黒くろ土つち村むら了りやう如にがら網あじ曳い利き兼かとし者ものハ
平ひら生せい犯まじ人ひとのは了りやうてて半はん心しん上じやう二にの念ねん仏ぶつ者ものらし網あじとし水みづ
了りやうしし口くちの墜たいちちくく稱せう名な一いつありし故こ了りやうやや矣い人ひと
よよもも臭くさ多たくくととももありし程ほど了りやうよよととややののてて身み作しやうも
親おやらしりし寛かん文ぶん七しちのの再またよよ也や了りやう親おや教しやうをを了りやう
自みづかハハ今いま日ひ往わ生じやう了りやうちちりりハハ母ははのの名なをを了りやう孟まうせんせん一いつ
ののままババずず人ひと物ものののねねままととねねししなながが孟まうせんせん一いつととし

ありありののくくかかりりひひ念ねん仏ぶつににををれれ一いつ身みよよなな大だい事じ了りやうて
竹たけををけけららくくととももぬぬりりせせれれとともも候まうみみがが腰こし
陽ひかりハハ水みづ了りやう浸ひ了りやう西せい了りやういいしし合あ掌てう一いつ念ねん仏ぶつ高たから
らら一いつ唱なむへへてて立たてて看かんちちりり了りやう時ときややちち移うつりり見み
ババ人ひとののあありりととももるる一いつししのの往わ生じやうとと還かへりりし
いいののぬぬれれのの田でん云いハハ我われ生せい了りやう了りやうとといいししくく雷らい電でん
ままぐぐ一いつととあありりししとともも人ひとをを了りやうすすててあありりととぬぬしし了りやう
ととのの後のちハハ大だい旱かん魃た了りやう了りやうしし了りやう晴は天てんににとともも曇くもりりり
雷らいととぬぬるるもも電でんひひくくちちもも一いつ里りくくちちのの行ゆぐぐ雨あめ車くるま抽ひ

と流しつ材の老翁うぶらも五七〇〇も
肝了深感しあり

他人夢入り入詩と賦し終と告

江戸川伯船寺修徳建室七の十月平信の差に

高僧まうせ海ハ末の二月在るありあけらるる

とねのゆきとを詩と賦しとありし身

六十四年混世塵 夢中不覚養殘身

不來不去是何者 二月花開南谷春

聖朝のよきと口癖のぬり云り明る度中

もの元日の發句了

えどどどどどどどどどどどどどどどどど

とて戯れて二月中旬うき意例のむじりてその

燈心ももろく亦四日了幸に來りて念了燈

終了ありし人の老了大ほと好も伝了

おろくよそくあれむ他の嘲も多かりとて心中に

いらり目むりきよりしすと人々慚愧しあり

紫雲彩花諸人奉て誦す

寛永三の九月十五日了崇源院殿遠例のりて

まぬしく一心を稱名おこなうてまぬハガしと
うや西の霞より紫雲三下じつ煉中にまぬはま
五色の花空中より燿燿せしうほし中のまぬ
奉て強きまじし中りし三尊の如まをぬくま
まぬりしうぬす日課のまぬんぬらまぬれ
ありとる

大坂如喜別時念佛

大坂より伊賀屋妙喜くよ后あり信心堅固の念仏
者なりし所りぬ道頓堀の千日寺に専念と招き我ハ

四月二日(日)往生するなり別時念佛をまぬれと
よかりくおひるなり妙喜くまぬく通夜をし
ぬつ妙喜くお祈りせしゆわのびてまぬは二足
まぬじまぬれまぬれ物と齊設てまぬあり次の身
立日なり笑納のまぬし清くまぬれまぬれまぬれ
まぬれ専念もまぬれそのまぬれまぬれまぬれ
東白く回向し専念ハ次より出て茶と香を
まぬれ隣の夫婦まぬれて妙喜の住をいひまぬれ
まぬれえまぬれ日ぬき香ゆまぬれまぬれ

まゝびきしし今ある別冊念仏しめ奉る
仏あり回向し看らるし例のゆゑに
長き回向しよへの勞れもあらんしと
呼吸の音もくゆりしころ

終てしつと神海し世別と後ま

大坂の所十一屋宗佐としよ者の妻若き比より
書典とよのし佛法と信仰し本性やし
慈愛ししに深しし延室ハ心月五日に
詰りし前百日齋しして及し且と女人

堂しありし金自ハカシてまて白くし股し脚
鉢巻しよそのし三人あまのし大服拾てよと
院壇上谷く院く砂く順礼し恙なく下向せ
しと地天和ニありし時夜と煩ひ既し
かつてししし世の口いしな
らしよしし日中おのし
純一しししし

婦の龜差し念仏の勝りし告

江戸尾張町清水会ありし者の後室智村

其妻のいささかして天和三年五月廿三日念仏の聲
とて大涅槃を説く聖徳三月三日智恵の娘
ハ五松原の帝の妻なりしがそのゆめに智恵来て我
ハ安養へ入りて微妙の快楽を極めしとこれにハ
我がすくやとて光悦言て唱らるゝ尤も貴き
よりあれは同じく念仏してさるれと慙て
告て羨まめなり

絹川の二聖念仏生で轉す

下総邑田郡一郡丹生村の豊たるといふ者ハ入り

了てつしと妻乃が産孫の姿甚く醜きれにやん
心なくもてかき向しきえ色者なれど絹川よりさ
り突たれし沈む報し同村の法務新なる妙林と
法名一吊ひしハ正保四年八月十一日ありとのち
とちあ妻と逢ゆきとも女せらるゝ五人あり六人
乃妻しすめ菊と産菊十三葉乃寛文十一年八
月中旬一母ハ身向るをし聖徳二月四日ありと
歎しす毎日こすおれを同じく亦三日入り口を
泡と吐眼といししと女とらしと神ハ三千五百の

絹川すくがわ了りょうて教きょうありしし累かさねりしし我われが法はふのよよしの法はふ志し
寺村てらむらの法はふをもちしし見みえししととむくむくたた恐おそ
しきりしきりをを詔みことしし人ひとの恐おそきき噪さわきき村むらのよよしの光ひかりまて
向むかハハととししとと教きょうしし頓とんてて僧そうのの北きたとと招まねきき祈いの禱たご
せせくくとと更さらしし駿うまちちりりしし然しかるる三月みづか十日じふにち飯いひ沼ぬま
弘くわん經ぎやう寺てられれ所しよ化け祐すけ天てん同どう侶りよ二に三さん人にん倡しょういいままりりててええ
ままふふ一いつ件けんののささししててままああれれをを同どう教きょうすす
數かず遍へん念ねん仏ぶつししてて苦くとと問もんへへハハ怨えん要やう今いまままししハハ胸むねの
上うへへへ君きみてて方かたししりりしし今いまハハ胆いで了りょうしし君きみてて我われ手てと

故こととすすといいふふ祐すけ天てん名な号ごうとと書か四し方はうのの招まねしし張はりてて一いつ向かう
了りょう念ねん仏ぶつまますすててすすめめととままはは怨えん靈りやう胸むねををおおききてて唱な
へへととししとともも強つよくくままととままハハ街まちくく二に三さんべべん
唱なるる辞ことば了りょうししけけききてて十じゆ念ねんをを授おとけけすすてていいとと問もんへへ
ととをを教きょうちち退たいくく又また十じゆ念ねんををれれををいいとと退たいてて西さいのの定じやう了りょう
ししりりてて君きみもも又また十じゆ念ねんををれれをを何なにとといいふふ人ひととと断つててて及およびびししが
又また左ひだりの方かたりり君きみもも四し方はうのの字じ了りょうししてておおきき海うみ也なりれれが
五ごかかくく以もつ裁さいししありりとといいふふてておおききとといいふふ人ひととと
ししりりとと目めとと夕ゆふしし茶ちや一いつ杯ぱいをを飲のみみししぬぬハハ何なにとといいふふと

慕いなる一も所へ先押さへこれして念仏を
 して掛る珠数と成してあゝ一掃王を一日
 又まゝいゝとさし多(北獄)掛系と成りあ
 又竹のぬ掛系の門あり信たりして此系乃の流る
 事と固く都くさぬぬそれ倍珠数と成して我
 名で妙樂と付さぬり又累の門外して女ハ
 定業まゝ流ハぬる一とそ家のまを我と掩ひて
 一ハ北獄なる事と云て去りにき、我々のいぬる
 一と一し一白き途ありて累の方へ成ると

掛る夢乃のゆめより他一ありと流るる流るる
 一珠数と成りあれむせれりん我のえし珠数
 一と一し累の法名と理屋照身と改め書を
 不生妙樂と名づきて一夜念仏して絹川の辺に
 石塔とて一也白身まの白の糸纏に又首
 一と一し一のあの一と一村人なりまゝ向ハ
 物いゝと天まゝさぬいゝ女ハ累とていゝし
 一と一し定業(注)せしりりれを再びまゝるる
 一と一し狐狼等干乃石考ると一責し一は我

は那云
カサ子
たぬき
のあめ
或書曰
果の女の
子有女の
前の子
多し
キコ川
てよ
脚
た

左の者にしてハナシ助と云者なり慶長の中
了絹川了して沈め殺さるるがけし累が從
野せしりよとて山一くせひて妻にすこし
村の老のいよくとまの累る兄なりその者の母
助と地を了して産ふ家た何おのたす嫁まけり
に継又助が生れ何りまといふて俗に言ハ
せよや一向了て云くは母おのふ魂く生ま
我ぶ了りぶせくさふ了誰人すやといひ候る
て絹川了りつまひて冷く沈め殺しり了後

年月
果生
れ
始
ハ脚
と云

川乃ほろりよして西の夕暮りやすハ五七某の童と
え一人多かりハけ助が凶悪なるん祐天了りく
すぬをて十念と授ふ菊ら助いと云ハ菊也と
よ助ハ何まハ習りしに右々といふ頃て早到
直入と法名書しぬじくは檀了りしとせられハ
菊指がしそあましくあす助が檀へりしと
よハ習りしの人とも雲烟の中ハに誰き者の形や
み方と何りハ忽ち光明ややくして家内を照
くちりよたあも甚く情邪戡罪しとせ

北の西入と改修し、單直了、念仏、空室四
年六月廿三日、終り、七日あつた、死せり
て、稱号、たゞ、聖相拜せり、みたり、く
つて、往生せり、さうり、
姫、麗、頭、を、抱、て、念、仏、修、す
常州、松原村、乃、嘉、女、と、し、百、姓、の、妻、ハ、美、女、に
て、丈、婦、に、中、も、抱、り、い、い、何、ど、り、し、何、り、
妻、を、て、必、す、く、し、け、り、我、凶、あ、り、て、後、妻、を
か、く、し、多、ふ、り、何、案、何、り、の、何、り、ん、と、言、を、誓、互、に

候、と、云、う、り、あ、き、口、説、法、の、よ、め、後、り、し、何、く、月、日、も
去、り、て、何、友、り、と、妻、を、て、ハ、さ、り、ど、り、何、り、を、後、
り、ら、り、し、が、道、れ、づ、て、後、つ、ま、と、さ、り、け、り、
と、れ、あ、り、と、止、妻、乃、怨、妻、を、て、妻、乃、首、す、ど、り、
抱、き、何、き、怨、を、何、り、何、も、き、あ、り、と、れ、恨、め、り、が、れ、り、
難、い、え、も、云、う、り、と、あ、り、ひ、り、恐、ま、り、と、り、
と、り、し、ら、し、何、り、し、天、台、宗、の、り、ら、れ、を、護、す、と、修、
し、大、般、若、を、と、り、と、り、の、新、法、を、何、り、り、れ、り、
何、り、に、と、り、し、ら、し、何、り、と、り、の、新、法、を、何、り、り、れ、り、

孫丹生村乃三命を乃庄を乃心して招きトトが其中
法問乃おられ心ざいひかしてまゝあ人ひて懐
燭一挺切了一念心せよと笑へ一は我くも念
仏了といふぞるが所悪具退く一まやと云へ天
汝が念仏と我念仏下しもかたむん疑ふならぬ
と云り一まゝいふれをあ人そくと得悟一と
取らるる同乃十四五人にがらひの村の者先おまじ
五千人をひく坊よりと教乃どく一焚切の念仏勤
て了し了とれ曉あ人のまへ病家より品を辨

人ともあぐまの計の怨でもなさんとおひひに
坊の貴き許希了と成仏と遊ゆしと云うま
本心よりしと云へ一あり

込魂回向親一坊よりと非難す

江戸之保町のせや七多を乃とよ者の娘乃乳母とて
妙信と法名す後了かへ一乳母を乃心ひ
心ぬぞときまぬ了てしりしは新加了れを駿
あつり一増上寺の袈裟初高とひくんを使て
こころの了法問乃了了といふまゝと云へ乃

信者とありぬ念仏もつとけりしゆへ教へぬりせ
 とまじきと傳へし教めたるなり一人下にし使
 するしうばいふに問ふまればはあはま佛の
 せきよりし傳へしとあはく辨法の高はのし回向
 しと我のせきよりしにしきよりしに生蓮が
 しとせよりし我ありしとせよむりれと云は
 妙法ハセ多き姉嬢としてけきまらばおまお位牌と
 云ふし押解しし娘のりりれを親とにせぬ
 もお念ふしして回向も念ひたりし妙信位

牌ハ戸びくし張回向もそのけりしと珠かりしけり
 せよともねどろき情妙信位牌と云ふなりとせ
 念ひたりし細くは返る思えれ海はくちりぬとせ
 若女聖号とてかへ畢

大坂上町乃はくし町いし今に多き衆とてし者の下女
 妻十八歳貞享五年八月廿日とて胎産おとせ
 廿四日乃とてなりが掌と合せ南無西方極樂世
 界阿彌陀如來起世乃本願して我とてすし
 ときぬと念佛ニ三千遍とて多しと唱てせりし

足とほふと念仏して母聖瑞と夢
下總国田郡羽丹生村乃庄をうつくしき者のふみ歩ハ
一心不乱と念仏し常と足とほふと歩をい
ふととよと若くやまると虫など踏殺んふと
おそきかくらする也又案の梅舟花日と姉に食れ
て弘經判祐天和尚の許とまりて十念と受名号
とふと来て塚王其夜とと熱く出とに若と
ふとしと云と唯一句と念仏と父母と側
乃人あも勤めて勤むせりノ宇舟土日に到り母

夢と異香四方り薫と花空に降西乃方と白
将東と一人舟とこままと黄ちり紫雲神と
信多ととととと船と糸とぬびと母愛にいと
弘誓の船と人船と向とととととたつとと叶と
しとととととと見ととととと音と空とまことと
愛とととととととととととととととととととと
念仏とととととととととととととととととととと
幼女呪とととととととととととととととととととと
阿州阿波郡栴原聖幢寺乃家妻利助がひとと

三業乃極身方了。母に抱られ居て光明真言
二三十遍。隨求陀羅尼二三十遍。念佛二三十遍。母に
後母が乳をびとちくちく入るがう天へ行がうくと二度
しりく寐入るがうとに息をくくりに臭香家内よ
薫ぐりしりまあり延室八子乃りあり

八業乃童子呪とすて念佛す
大坂道頓堀竹田庄にとりお芝居乃留吹半とあり
ふ八業ありしが疾とすけらひ水身に弱またの
りくありし時親はくはくくに依て真言宗にれ

バ光明真言とするありしかのふつ居てお
ほり遠くと云てまて念仏十遍を唱
へて目と少き地作しとる

白子の宗西終よ除く遺語

勢州白子の八助ハ有福の者少て例も公なく
仁怒ありて極めしう後世福びひかりありて芽
了世とゆづり法然して宗西と号し懇
とて抹香とらるる人との信心の程を窺ひ
念仏とすめりりける時隣め妻不品ありて

おびとしく（おびとしく）焚（たき）せう（せう）あ（あ）畏（おそ）し（し）と（と）呼（よ）叫（び）
てゆ（ゆ）う（う）ち（ち）あ（あ）う（う）あ（あ）ま（ま）る（る）が（が）且（かつ）く（く）あ（あ）り（り）て（て）枕（まくら）と（と）り（り）あ（あ）
宗（そう）西（せい）の（の）十（じゅう）念（ねん）と（と）う（う）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）宗（そう）西（せい）も（も）我（われ）が（が）身（み）
あ（あ）れ（れ）を（を）と（と）し（し）辞（ことば）退（ひ）き（き）と（と）び（び）く（く）せ（せ）く（く）あ（あ）ど（ど）一（いち）向（こう）に（に）の（の）ま（ま）
し（し）ら（ら）悟（ご）真（しん）寺（じ）の（の）和（わ）尚（しょう）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）
清（せい）り（り）し（し）ら（ら）五（ご）重（じゅう）相（じょう）承（じょう）の（の）人（にん）あ（あ）れ（れ）を（を）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）許（ゆる）
さ（さ）ま（ま）一（いち）頓（とん）て（て）十（じゅう）念（ねん）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）
ま（ま）か（か）く（く）や（や）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）
倒（たふ）れ（れ）ま（ま）る（る）寐（ね）入（い）二（に）内（ない）と（と）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）

あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）宗（そう）西（せい）條（じょう）終（しゅう）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）一（いち）發（はつ）と（と）集（じつ）
て（て）送（そう）言（げん）ら（ら）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）五（ご）重（じゅう）相（じょう）傳（でん）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）い（い）ら（ら）に（に）あ（あ）り（り）
ら（ら）し（し）と（と）し（し）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）一（いち）言（ごん）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）隣（りん）
乃（な）妻（さい）と（と）り（り）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）
中（ちゅう）と（と）り（り）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）あ（あ）ま（ま）る（る）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）

竜灯室より入り彩花室より元

上（じょう）総（そう）の（の）福（ふく）ば（ば）ら（ら）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）大（だい）悪（あく）者（しや）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）
し（し）ら（ら）い（い）ら（ら）る（る）遊（ゆう）者（しや）の（の）因（いん）縁（えん）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）一（いち）心（しん）不（ふ）乱（らん）の（の）
念（ねん）仏（ぶつ）者（しや）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）人（にん）多（た）く（く）す（す）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）勤（きん）め（め）と（と）り（り）あ（あ）り（り）し（し）ら（ら）

遠御のこちありしが暮て少て去る一後朋友
れを悉くいしぬしひり歩きた刻の三日まへより
日またのもし大樹寺より少きて本堂の弥陀の
まへより塔堂合掌し念仏聞りや眠がこゝに
息まへゆりしとよまの信者死す生者のやと
まへより少くはとて七日が方灰骸と拜せあるり
虚空より玉を乃花より夜ハ龍灯のありて
堂内より入りしと拜し人多かりし

大津の樵夫はひり化佛とえる

大津の黒おろしより専修の念仏者ありとあり
虚空より小き佛と拜じまへ乃花の文像より
拜まさせしむあいのや百萬区の方霊和尚より告
りれどみ方外のみりく相りぬへて人より流るる制
しきぬしあるとくや河をけすにじ公地りきと
云しお聖聚来迎りしも眼あし拜しある
や人より告大徳生と遠行りし
てて行寺と一は
は通町中橋より宗村といふ者頗るありしが

寛文七年二月七日一族の面々とて預めて我
の日後終り冥途事了りて終んとて念比了
いと白くして駕えたりてかの寺中のほ忍坊が菴
了り入り珂山和尚と招き十念と授けられ八日
了りぬ今日も彼岸あり我々彼岸にあり
せしと戯れなむ

かの岸よりいりてまきいろく海なる
しと吟念仏ありと念とありにおりぬ

高誼衣と掩ふ

土佐高知乃塚下水町地保と云ふと云ふ者女二
地室二女乃其のころと云ふ一病一病七月初九日
了り親とむいしもの最期當りしと云ひ一弟と許し
きぬりぬその最期の願りて連枝八本同根に
て中りてい冥途の所よりもつとんと云て
まげり云一は親の妙なり志と感とあり
堅く誡めと云一弟とむいびと云一おれ心
はかすともい孟孫んころと云い一我はひ
すもきりて東と一番音曲なりと云

後人の必面ハズにくらもぬらうと衣ひもつた念
仏數聲しく悲しきそ

和易順西日と云く西にひく

和州新左衛門尉の目切の甚七といふ者ハ乃乃
の律義ありし幸茶の比妻ハ跡に五十
余歳の女といふい字多郡茂地村の伯宗乃
忠たわが山の端とやうな古き家の庵と云ふ西向
の戸口と云ふ隣郷の浜村乃本誓和尚と
まのい母もとも孤髪一母ハ妙意自らハ順

西と号し一心不乱と念仏せし順西と云し

ハ我ハ八月十五日ノ夜生と遂ると云し

果して八十一歳の八月十五日ノ門の戸口に腰

ツと西と云ふいふ事と云ふ体と云ふて念仏

し午の刻と云ふ際と云ふし

恒式と云ふたがす

大坂天候の典不町と秋岸といふ禪門の心

きつめて直ちし人なり七十三歳貞享四年六

月一ありて起すたのしむるに思ふて

廿八日一佛入妙心光の遍照の文と増念仏
數十遍のうへへして回向の偈とよし俯伏す
ちんわりのぬ

書とのじて終てまは

京室町山王町了るる後あらとよ者り
性柔和にして智人の勝れり明曆二の
了るる一書とのじてぬ
の妻予友方人念仏の勝會といふて
十日づいにいふ貴き業と勵こぬるまゝ

唐土の琴と新蘭了るるも情け
流も一音乃了るるめりよき一葉とま
ゆりぬるて口の端より持名をせりぬ

預め葬取とえは

尾州相應寺の中東月院の僕小三郎十六歳乃時
墓取の空地とえまて是れん我葬所なりゆ
日くわたりて掃除せしむるの貞享四の月
十日より念仏を成す

誓願寺へ四十二年請す

京祇園町了理西とくきつわら信者つ誓願
寺了日参了りより四十二のちり暴風供雨
日ととも更了つたにとて天和二の九月常
りるる賑通りれどもはの若しじのちり十七
了目女所まりりめ我ハゆは日遊せん向
二夜三日の別時ほりめ預りれとて自ら後願
文と誦しかりく念仏し十日辰乃却
息くゆるぬ七十四葉りり
野々々蓮臺と擁す

江戸日本橋二町目乃吉野ヤ七多たるとよ者の母
純ハよ葉の伝心りしに元禄十二の十月廿三日
了齋の床了り所なびり画る末途の像とてり
我ハ下品乃遊生りり所とてゆるせよと念仏
數十遍りり観音の蓮臺とよにりりりりり
し息くゆるぬ
生龜寺了詣す
武州熊谷ちりきと吉野村の新梅院の檀那坂田
志兼久と煩ひりり寺りりりりりりりりりりり

ほりーちりーのちりーにむらさきの寺
詣で仏おと拜しそびるせほりーとてい
あーそれろハ世にせめたーと
おしりしほりー又祝の候とほりーと
ハヤぎうにおえく内と祝の候とほりーと
魄のえまてまろくく地と祝の候とほりーと
ほりーとまほりーとまろくく

六葉の童子地蔵尊にふむむ

江戸東職に町目いせや利ちあがぶ又ちあがぶ

元禄七の春遠例一二月十日まのまろくく
舍利水と注ぐ香地蔵尊の像と拜し一おかけ
壇の弄いぬちとたむじまろくく一そく口の
倉組一注ぐまろくく一とちりー

四歳の童子頭め成期と知る

京都彼屋の多たあがぶ三葉の村と合仏
しに葉の七母聖霊會一少桃灯巧まろくく
りりりそとほ山とそこの下と問ハまろくく
今とちハ刻丁ちまろくく先燈と佛とまろくく

延宝三の卯月十日大徳寺にて参りしに
宗廟三及堂の入りし種色乃花より異
香のあり歎くある傍々参りて拜し
まうるるとや

古来の参りし所の参りて拜す

大坂松屋町通り瓦町二丁目末松の住居より
穂之助七郎元禄五の卯月十日参りしに
一日は朝父家参りしに参りしに
今日ハ宿りたりしを頻りに参りしに

五ハ云をしつゝは今日ハ参りしに
長者の参りしに参りしに
しかどしつゝは今日ハ参りしに
夕飯の参りしに参りしに
花の参りしに参りしに
所へ参りしに参りしに
まゝの参りしに参りしに
参りしに参りしに

壯婦の参りしに参りしに

大坂田案橋一町目に相傳即娘十五歳なりて
蘇州縁付一聖元治四年二月一日遠
一々本徳一々一々一々一々一々一々一々一々
内移一々一々一々一々一々一々一々一々一々
十月一日一々一々一々一々一々一々一々一々一々
懈怠一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
徳の文と唱へよと令せ倚伏成て息と行りし

如來降臨一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々

阿州徳嶋通町一町目一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
優一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
者魔の行り一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
只父母の老て後世の公があらきれも一々一々一々一々
一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々一々
了善提取の思國寺の王と拓き十念祈んたに

授^ト二親^トと夫^トと母^トの十念^トでも又家^ト款^トの丈^ト
了^トハ三^ト計^トヤ^ト十念^トで授^ト親^トとくいとぬり
ワ余^ト今日^トまで^ト五^トや^トくも西方^トの如^ト来^トを
よりと^トる^トを^トせ^トぬ^トい^ト誓^ト正^ト茶^ト子^ト額^トと^ト摩^ト
さ^トぬ^トぬ^ト痛^ト苦^ト了^トし^トも^トす^トす^トる^トし^トも^ト
念^ト仏^ト三^ト昧^ト了^ト入り^ト平^ト五^ト茶^ト了^トて^ト性^ト生^トを^トす^トら^トる^ト
し^トと^トる^ト

奥^ト賣^ト九^ト茶^ト西^ト了^ト倒^トき^ト率^ト了^ト

奥^ト明^ト吐^ト唐^ト郡^ト小^ト竹^ト溪^トの奥^ト賣^ト九^ト茶^トハ^ト津^ト義^ト芽^ト

一の者^トを^トれ^トて^ト人^トと^ト本^トと^トと^ト監^トハ^ト松^ト寫^トハ^ト高^ト賣^トに^トを^トし
ち^トり^ト了^トて^ト日^ト中^トの^ト法^トと^トめ^トの^ト念^ト仏^ト了^トて^トせ^トる^トに
條^トの^ト賣^ト人^トも^トあ^トら^トぬ^トあ^トへ^トて^ト損^トと^トせ^トる^トの
し^トと^トる^トれ^トて^ト是^トと^ト面^ト目^トを^トす^トる^トに^トお^トい^トは^トる^トに
ま^トり^ト三^ト三^トの^トて^ト大^トり^トの^ト敲^トき^ト鐘^トと^ト二^ト面^トり^トち^トや^トり
た^トの^トく^トと^ト大^トら^トの^ト損^トと^ト掛^トり^トか^トど^ト又^ト妻^トの^ト思^ト
報^ト了^ト鐘^トと^トす^トい^トら^トん^ト所^トも^ト念^ト仏^トと^トぬ^トア^トし
了^トり^トり^ト自^トハ^ト奥^トと^トる^トり^ト行^ト住^ト生^ト解^ト稱^トを^ト
た^トら^トる^トに^ト何^ト時^ト我^トの^ト後^ト日^ト御^トを^トせん^トとい^トぬ^トら^トる

了り妻りさうとて越方の友家とほりしれり
程ちうき川了て水とあびあてほめ念ひし
曉し言しその日の午の刻しうりにとて
刻ちうつちありにやとて門了出空と詠め内に
入り我道生せし西の方了倒きまんとて
了念ひし鐘とてし了水身に了念表へ
云しに遠り西了倒き道生せしとて
佐久問のれ黄金宮了生じ
江戸大傳馬町佐久問期終由とつういの下女所ハ

天性仁慈乃志少くて胡夕乃餃我かハ念旬人
了りやとてその身ハ何かり照めしおし又ハ
流しの隅了網とあて置れのを海りし也と食し
はの了口了海うせて称名しとてなり何所頓死
せしに女も温まりしうは若やいそ人こちり右
了りて遂又獲生ししうりうり又冥途のものを問
はされえりくともちく廣野と道し黄金乃
宮殿あり佛はししてこれハ海がまる其まり
とてしとてしとてぬのち念ひしとて稽首

して大住生と云ふ一を承乃その湯を山と詣て
竹と逢ふ竹が曰初、安養世界に候なりし
ありしも嘗ての念に一も又他とあはむ心
せり云て了るや竹は二網とあは
流し一は今増上寺念仏堂の院の門の天井に
ありしなり

二通和尚法座入滅

常州伏連常福寺二通和尚寛文八年四月十七日
つ安右の法門還思癡乃筆題了て扱ひ了て

大衆了向て十念と授ち直く眼をもちき
いりも時をぬまハコハいりよと立きて
又ゆり了了合掌のちと乱まが結加乃足
もなぐれずして安んとして入寂し

毫光堂

洛陽西園寺玉誉和尚八平生自利利院一を念
佛懈怠なるは中乃附本堂の内志きりに
光の赫奕しりしは怪しむりしやいふ
中乃弥陀仏の本儀なりとれ白毫よりと放る

光りにてもつりあり堂の内亦まぬはぬ
まが遠目つり火の乃ぬ又入て
よりつりの海の時わが受つして終つて
佛光まの時もつりしるんま光河合松
う備まてもつり

遺骨念珠つりの舍利と云ふ

三縁山増上寺了學上人の寛永十一
念仏三昧よりして終つて
骨悉く舍利と云ふに掛せしる水
乃

珠數五色瓊照よりしてつり又舍利と云ふ

預め蓮臺と云ふ異香室了薫す

如幻律師ハ摺州任吉の杖田比丘の上足り
病身を候しあれを大坂上尾町
菴了て保養せり延宝六年霜月十五日乃
暁天弥陀尊眼前了事いひく女も
の臺より指ありいひく條の物喜強
盛了して念の念にあり

て向ふれをまじくしと誓ひ歎もあつたなりと
へく矣音室因り歎くありとれ十七日に
合掌稱名しして息とりの氣たぬ平は妙
歎知足いしく願施すともおぬ少くも
のりして奈はるる大さきしき

念仏法師三好相と感す

證誓念信ハりまの取の人とりつるを
十月十日新の秋を卯に先年る母とゆめし
いづく我ハ今上取生らる地念信いづく

菩薩のやうもいづきしに
ゆるりいざ菩薩の西相拜
忽思としく瑠璃地
玉の珠やあまの心
誰く三人らり地砂り一
確ぬ地十二日又月
一村やうまの第一雲
忽ちは雲の色と書す

土了りぬとねんが菩薩のくく見減す中に
大蓮臺のくして佛いぬとすけの向うんとねん
内へ忽ち文室の生像の如き金色のひらりと
放て行者の身で照くく即頭とみそ拜
さる不了如きとくくの菩薩了りひらいて
空を我の法問くと又もく向う所謂空を我とい
但信乃禪師これ也と法法法にりて菩薩衆
了り告くぬくくくくくくくくくくくくくくく
早の也諸乃菩薩念信了りひらいてやうしん
結縁

きまむとててて後法めぬとくくくくくくくく
はひのともくく目あつて白蓮四流菴室の空の相
了りかたては時とくくく問問目かとも問目りも
及くくく又美吉室内く薫すほのく八月二日了
光明遍照の文と唱へ念佛七千へんきんきん
来迎くと三とい告て微笑くくおろくき
利春法師友と辞くく即往
勢州鳥羽土井因房と美善提取く利春くく
候り日東信心堅固の念仏者了りくくく

あり何あり一都りありまゝ一かど何あり一教あり一書あり
ふもそくばりしがやのそくやけりもん相とれる
西くふりて我ハ頼て身ぬるなり一妙とて
業ありと云けりもてまへぬりてやのまゝ我ハた
今世生てりて日中に本堂より瑞生念堂し
る声あり念れしありと不審くおしひり
後て我て回念にりりしめせんくは声弱
て眠ぐぐに生ずるあり

骨舍利と化し一灰紫色と書す

檜州東成郡放出り出田寺の空山和尚ハ道德い
じそ人そく皈依せり生野のあ二三日程と何
人の所よりそく歩きぬりて帰て快くい
それ曉天て僕とれこ一びく妙水とワテ一
我ハ今日生ずるなりとそく佛おと莊嚴
し香花燈相とせり徐うりり水一をぬし
僕て向て今條終の念れと細りをもぬし
ありて助音せり若わが一急弱もともぬき声
そくへ一回向の文たりと十念と授らんぬ

了まべしと歎けしに、
新解遍照の偈とて、
此の徳は文とて、
了晏思して息とぬ火華乃、
世壽七十歳とて、

夢中に三つひ聖告と蒙る
濃州海西郡 小浜町
念仏の外他とて、
寛文十一年五月十日也

八月十五夜了、
今日往世と違ふなり、
霊夢とて、
三日の夜の後、
入夢乃、
了、

て好水清くかよへて里人に清りし入清部既に三夜
すおまびし一正定めて今日際終にせしせしめ
部すく少くもかろくきりもなりれど何れも
戯れしと隣の者も今日八祭念の性生なりし
るもあつぬも毒の凄し己の切すし聖念
開闢の鐘くちるりし念の初し一皮數百の
俗吳口同言すし新す念にすし物のおや
もすくかきりし祭念ハ鐘くちるりし
とうちよと捨つる右乃とすし技まともらるし

りりるや安生乃ゆすし海終しき程の長久し
鳴りしは嘘しとそしはすし暖氣あやしく
は手ぬ人と巧まるまに驚く是くして三日法人す
ゆせりる

異香四す了薫し華あけり多時

阿州阿波郡鏡原乃妙西尼ハ何乃許の人とよ
りやあつびとれ又幸画くもははふりまうて
食念はすすぬの如やしやあはは皆人きい念
すあろ内幸念念にして往す妙西にしく

新^{たまた}てりのめて惣^{そう}とるにやのち二ひをわくすをそ
か^かい^い針^{はり}の^のり^りと^とそ^そら^らし^しが^があ^あま^まの^の死^しが
と^とり^りて^て即^{すなは}日^ひあ^ある^るひ^ひし^しん^ん瑞^{みづ}生^{せい}念^{ねん}堂^{だう}し^し念^{ねん}仏^{ぶつ}
乃^のと^と相^あ後^ごし^して^て眠^{ねん}が^がし^しく^く條^{じょう}終^{しゆう}す^す異^い香^{かう}室^{しつ}内^{ない}
了^{りょう}も^もり^りて^てと^と隣^{りん}ま^まて^てに^に薫^{かう}く^くり^りて^ては^は空^{くう}
空^{くう}り^りま^まら^らじ^じも^も五^ご色^{しき}れ^れ花^{はな}あ^ある^るの^の一^{いつ}日^{にち}一^{いつ}夜^やり^り
ま^まら^らず

信智の信男天樂来也

信智^{しんち}如^{ごと}く^く尾^び州^{しゅう}の^の古^こ屋^や中^{ちゆう}下^か町^{ちゆう}の^の人^{ひと}也^{なり}か^かま^ま

孝^{かう}心^{しん}少^{せう}く^く後^ご世^せの^のた^たも^も殊^{こと}や^やべ^べり^りし^し二^に十^{じゅう}二^にの^の中^{ちゆう}來^{らい}妻^{さい}り^り
わ^わく^くま^まそ^そと^とれ^れ歎^{なげ}き^きつ^つを^をま^まが^がく^くお^お親^{おや}り^り辭^{こと}して^{して}
家^{いえ}と^と弟^{てい}と^とつ^つと^と十^{じゅう}餘^{じゆ}町^{ちゆう}を^をび^びて^て花^{はな}の^の末^{すえ}村^{むら}と^と菴^{あん}室^{しつ}
と^とあ^あり^りら^らひ^ひま^まづ^づ朝^あ夕^{せき}の^の儲^{もろ}と^とそ^そ品^{しん}仏^{ぶつ}及^{及び}の^の修^{しゆ}也^{なり}
そ^そと^と又^{また}日^{にち}か^かの^の法^{ほふ}名^な山^{さん}の^のさ^さり^りを^を回^{くわい}國^{こく}す^す人^{ひと}の^の法^{ほふ}と^とお^おお
し^し書^{しよ}と^とよ^よめ^めと^とす^すし^しら^らの^のま^まを^をま^まれ^れを^を受^うけ^けて^てい^いま^まに^に修^{しゆ}也^{なり}
ハ^ハ何^{なに}も^も改^{かひ}賢^{けん}の^の有^あむ^むを^をい^いち^ちら^らん^んヤ^ヤ又^{また}學^{がく}問^{もん}し^しぬ^ぬを^をれ^れ
他^たの^の非^ひと^とて^て後^ご世^せの^のさ^さら^らぬ^ぬと^とあ^あら^らん^ん只^{ただ}を^を智^ちら^らん^ん也^{なり}
よ^よめ^めと^として^{して}一^{いつ}向^{かう}す^す念^{ねん}仏^{ぶつ}せ^せし^し延^{えん}室^{しつ}七^{しち}の^のま^まら^らん^ん

如地保りしは同書にありて一日の如く死に給ふや知事んは
日正と地をくし自ら南響を阿彌陀佛と名を清きて
心安りし僧をいふ人も呼ばれぬ少時雨ふりて
て海流りしは同書に念仏をて頻て四辺を
かまそしつるまはるや等歌の声はあつたや如
乃飛又ゆらぐや等歌の聲はあつたや如
たりのちる三十の集はてはりしとあり

珂軟和尚茶毘智郁

江州錦織寺珂軟和尚ハもとや靈山散寺の如き

ありし後不問等了はしむい新編了童也
市乃内乃名人上告ていづく我下亡の如きとを聊う保か
より乃を著我五教成然しそはしむ定定行生セハ火
茶の内真意下ししもちるぬと著所も乃るは
例とれすす履くとして念仏懈怠りして候後ヤ
まきる茶毘の付件詞了すししも遠りたえも
しぬちてしち香のしして送辭もる著く舎利
とありてしあふ

慈愛信女聖相現前

妙成ハ伊賀の西上於の住人山岸岩之御子武士
の女あり少子の時より慈母の心取らざる天
正に一人のいふ事落るがゆりて一生詳
てあり唯命盡せりれして乞食とていひ
はすりよき下人こそれといはんも狼ウルフく
たりよりやとして能く飯のたぐひを後の下に
もてゑ乃日雪の朝なとハけて絶てりけり
たり稱名專一にして佛の目おし出現し
又浄土乃七宝莊嚴乃具照かやきて親ハクとて

何じきびく感見す行年八十六寛文二の春
改西了して正念して往生とてり

壇通和尚遺骨舍利

かゆりて先明寺壇通和尚命終したる日大衆とあり
是夜夢の臨終あり回音する念仏をのりし
數百人の夢候とて湯へ入りて息たつ
せりかふ山上下りて火葬せしに異香自然トク薫
りて過骨とて舍利とあり念珠も又
六十粒なり光と散ちあり者中に弟子

祐天和尙行持堂了（龍）杖履をいぬれらるに
好日と強て何のきりしもよつちれむらむら
やうしきよにたりし一きまがとくくらけり
晴天白日の雨道場（雨）にうらに雨やうしし也
屋上紫雲反裏舍利

は州長根内常寺實譽上人十年ぶりの病り
て寛永十九の八月十三日うらうらげ隠居ハ十五日と
つひそわたりし不念今日うらうらげけりしとて妻がし
あつしむらひ念ぬのし念とそりし眠らぶさうく

きぬひぬその内断りつらう（おん）のよる紫雲（おん）
駿く（おん）焚葬の後迷戻り舍利をゆえと也

父母往生の傍相と告

椋梨一雪ら父幸温ハ寛永十七の四月廿九日に母を
しぬ妻の妙安嫡子成田清閑甚（おん）し憂ふびみ
中陰了（おん）父母ゆるに妻の妙達（おん）しと嘆（おん）するま
我ハ貴くも安養了（おん）ししぬ歎（おん）しと色（おん）つらみん
これ又よとて袖（おん）とひるぐへ（おん）に扇（おん）のぬり
又（おん）し何（おん）とく光（おん）りやきて黄金（おん）の色（おん）に

トてなりけり妙安も佳閑も同一なりにはるる
ぞくもさくも笑へていづく回舎一蓮の信と
場あり妙安ハ寛文ハ子十月十八日不
一雪信のり父ハ改定御生しるる
母ハいうありとわしい書せしに貞享及び三月十
五日に差り兄の佳閑巻る一書と携てこれハ母
妙安ハ観音大士のしるるを記せし
女ありこれるよとて雲ハ一とて確ぬ

幼女遺骸踏踏合掌

江戸日本橋大町乃舎持惣と云ふ者ハ娘ニ
あり佛あり念仏ありが家あり母に
今日ハ佛前ハ香花を備へしんあり
念仏してあり之業の元禄十二年正月
怪しきあり差とかんとして病く
洩して十二月廿日の末父より
二階の如来とありて
顔色のかりとて頓て尊像を

うけしきし新入念仏唱へつてその日の夕方
を儀下りしきつく法了 偃坐伏せしを此
息と作りぬやれらる寺よ送る火葬せし
骨佛額了 石長二寸を以てし其見の蹲
若るに似て所足と立て腕を張てよと合せし
所々ぞ 跣踏合掌の相とありし故口の草
掘所より遠州 後松は林寺に贈るゆりし
蘇生して冥途の舍利と持来す
丹波舟井郡 莖田村の山内彦左とて者ハ其ニ

の念仏者了て仁慈第一の者なりし 元禄二の梅
節日了 二千七を以て方海にじごおの蘇生し
我冥途了てまじきりたりてけ 佛舍利以載
せしそて左の掌の中に光明赫燦とて一粒を握
若る村人壽美の結縁とて群集し念仏し
回三日の午の刻に終に念入大徳とて
後し没後し件の舍利ありせしとて
ふりどほりてそりゆりびい人おしありれり

川崎 教俊 高曲 終とて

江門 栗太郡 砥石村 川邊 教後 武藝を好む人
あり 痛く老ても 尚後世乃いづるをうらうら
成身乃子と失てしめて世のをたてふとも
以任世外一向專修の念の者となりぬ 八十
延宝三年 極月廿三日 家頼とす び我頃日ハ
世と去る 例のハ廿七日 小餅をばし かく日
了せしや 三付て廿四日 一族を招き 酒ん
入宴を 我今日世とけし かく 難
盃せん かく 數献 かく かく 悲入者 一曲
しめせとて 高らう



唱ふまの佛も 我もは かく 南無河法陀仏の
至誠心 深心 回向 發願の 燈 耳に 深て
返りに かく 十聲 一聲 數ハ かく
肉も かく 迷へ かく かく
中 謹い 佛と かく かく かく
少身了 声 かく かく かく かく
鳥 かく かく

大坂の專西法 かく かく

大坂河原邊伊達町久宝寺屋敷西ハ齡ハ年七歳
未いでい初はつりて本願寺日参せし一向の信者に
て所しりし貞享二年九月十六日ハ秋檢系譜ハ
用もちませしとて坊ぼく筋すぢりて十徳とて坊ぼく筋すぢり
十八日ハ念仏回まわり乃すなはち念ねん中ちゆうハ所しよす招まねきし日ひま
後ご世せ也やとてして知ち死しとて問もん時じぬる事ことハ
我われ性じやうハ只ただ今いまなりとて所しよす招まねきし日ひま
とて所しよす招まねきし日ひま

徳嶋の梅に臨末書句

阿州徳嶋より梅心うめこころとて連歌誹諧れんかひがひやと嗜たのしみし人
所しより八十二歳はちじふにさいよりしとて所しよす招まねきし日ひま
貞享四年六月九日ハ所しよす招まねきし日ひま
世よハよ々々とてえしとて所しよす招まねきし日ひま
とて所しよす招まねきし日ひま
と二句書ふたごゝのとして一向いっかうハ念ねん仏ぶつとて所しよす招まねきし日ひま
頭上づしやうハ光ひかりとて所しよす招まねきし日ひま
京きやうの六條坊門ろくじやうぼくもん新町東しんまちとうハ所しよす招まねきし日ひま
禪門ぜんもん所しよす招まねきし日ひま

おもしろし 幽るる 任君せし 流石の本性もく
ゆきりやー び 西を 兼一 よしして 備了も
備了のハ び び 備了 彌陀乃 本願の 飯伏
三つー 鈕と ともく 声乃 ぬき 念仏せし
と 此ハ 頭上より 光輝と 故ち ありて 拜し 堂
ハ 海に 生れ 乃 阿弥陀仏 ヤと 感涙あり
若 傲慢の心 出も ヤせん 人と 云合せ 當人
よハ かく せし 也 寛永の末の ころ 寺 堂 兼一
し して せきたり すと 遂ら けし 也

新著聞集

殃禍篇第十四

燈貪老婆火車 廻 去る

妙嚴寺の僧馬 といふ

日蓮宗僧活な び 天狗といふ

卯見の 醜母不孝二娘

燈貪富人 成し 絶報と いう

犬と 現報

人々 強し 斬り あり

情慢の織屋機糸裁

嘆火空しとみる

慳貪夫婦とて犬とて吠

非道姑暴親を夫婦

劫盗遠く去て逐う刑せぬ

鶏乃毛び了生す

頭了鳥乃嘴と生す

級生の現業無根乃取と生す

楊枝咽り入りまらぬと生す

貪嫉締りて教て却て成す

犬少久古語て娘とて報す

送風家入貪嫉首と生す

賊夫鬼とて首とぬく

産婦恩とて口をき熊の爪と害す

梅溜衣素の積悪

狐の耳口とてきり根刺の爪と生す

馬の尾毛とぬき女なまふと生す

野男三竹口毒身と害す

非理之判を以て人角に觸られて死す
不孝の罪士死尸 廟よりする
他賊を撲死して後自害して死す
貪財の嫁娘 勢族刑をやむじ
父を殺し 辱滅す

親夫思ふに...
道徳...
...
...

慳貪老婆火車はくま

大村因幡をいふお乃浦田や船りて通るき向ふ上
ひよりのまより思ふ一むり主事のま中にて鳴呼
やと叫ぶ急れ一ありと怖くくおひひと
可の船のうへ向ちくまる雲中台足のさかり
と遠くの者飛つきて引お海一是と云れは焼
の灰よりなり不審と知り不純の浦屋より人々
立止らぎしうは是煙二人の船より出し主事と
まりのまを向ふと取むる者なり

枕本屋の母はく〜 燈食放逸乃者あり 笑うが
便り汗をくしぬへく〜 愛を思ふ心もまじり
連なり〜 愛を頼てせられぬまじりしもの
誘ひぬふつをまうてんをしぬを〜 某の由に
ていへ〜 懐く必骸と〜 ひく〜 嘆きの寛文
十ののりあり〜 世よ火車と〜 ころ者の悪人と〜 編
り〜 ころのありし〜 ありきも〜 ねがぬらん
〜 人〜 舌と〜 ぶり〜

妙嚴寺の僧馬とらる

三河豊河の妙嚴寺の僧は〜 伯宗と仁人なり
い〜 ぬ〜 も〜 あり〜 ハ〜 口〜 あり〜
後ハ豆をの〜 喰ハ馬の〜 多く〜 舌内通
ぢ〜 是の働も馬より〜 天和三子の今〜
り〜 他宗のあり〜 祖〜 あり〜 あり〜
〜 同宗の傍〜 あり〜 あり〜 あり〜
現在より〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

日暮とみ候はる〜 天物とらる

洛陽の東に松が嶺あり日蓮宗の寺あり上人あり
の人ありて門徒はもと上人分の聖ありありし師
煩て遷化をすむべし一に比ふる何となく
れあはるる物すごとく看る所の如くゆめをさし
しみ不慮とすむがうりもゆるげとて四方を吃と
えざる眼がやまふあく一鼻をくちり左右あり
ぬぐい生て圃より走り出て擲るるに妙とて
しむしよの如意が嶽り飛り妙あり成
し弟子の上人五人とて宗昔とすむ中

浄土より指し成てあまの長城とすむあま
るありて多くの人を念仏とすむあま
ひ人のりりく流して舌を擲ておそれあり
あまのりりり人の思ひのり流りいすれ哀
あり

邪見の鰥母不孝の二娘

武州板橋より一里あり西へ田村に鰥の女あり
婦人ありて姉ハ女ありて妹ハ女あり
妹ハ十八歳あり正保に己五月に白く妹娘母と

きんぐり子抄擲しつる御所よりつるて帳帳の内に
を度しつる一々天儀又かきつるり大庭之
きりし津雷おらかまかの女やつらひあま
うみきりゆり又るがとけねそれゆやとで
婦も不孝うそ朝夕食物もいさくに喰せぬ
ほくつらしと聲あやしくして下人ハ跡
出しし書みゆせとてうよとて走しとねれ
姑一りゆりせし母候し喰もへ娘帰し
又し憎きあまうとて走りかくり奪り

あらししう母ハ煩ひ居るがはしくゆり
くしおみ戸とよせ投し筆置き頓て様
ておるさんとつらふへ娘何としあをを
おのちちやのをもき誤て流しし母ハ身
又成て頓て娘し西しい好しと筆細と流
してあく傳言せしうはぬ志り
あくあきしきと取てゆりすりし
あう母ハ則ておぬ娘も流るく矢竹し是
聖貧富人刻しと鏡敷とく

幸新町通出水吉町と大みちや銭屋とて
大福長者つらばい〜 憎食も無事〜
世人眉とさしめりつらばい〜 行し〜
食部千人集りまらう呼気匂せ〜
あつと解と解してりさ〜 家のつらら大構〜
ま多様上と下〜 さら〜 下れ〜
い曇〜 と疾〜 さら〜 食と〜
さら〜 し〜 さら〜 さら〜 さら〜
さら〜 彼者身海〜 中〜

近き一敷のゆやと差戦の廣は〜 彼
この枕上と立〜 さら〜 さら〜
ほきりて比の〜 さら〜 さら〜
比〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜
さら〜 と蛇〜 さら〜 さら〜

大と〜 教と現す

養生下野多々家妻塚千妻と云はの助と云ふ
彦区（彦区）の市ありと云ふと人の秘録（秘録）あり
犬也報（報）しと云ふに二日めらる飯（飯）で場（場）に
ありてと云ふと麗（麗）の下（下）に寐（寐）て淫（淫）まの人
ありて大れと云ふと中（中）より助（助）義（義）ハ
了（了）死（死）りしと云ふと市ありと云ふと新（新）衛（衛）
しと云ふと後（後）ま（ま）と云ふと人（人）
人を報（報）しと云ふと強（強）て斬（斬）ふあり
京大（京大）と云ふと中（中）堂（堂）と云ふと傾（傾）城（城）町（町）と云ふと何（何）玉（玉）の

者やん（者やん）辻（辻）切（切）り色（色）ありと云ふと十四（十四）の夜（夜）丹（丹）は
乃（乃）藤（藤）山（山）と云ふと刀（刀）服（服）乃（乃）と云ふと
中（中）よりある人（人）秘（秘）刀（刀）ハと云ふと此（此）京（京）の（の）主（主）に
あり乃（乃）男（男）と云ふと切（切）りてと云ふと切（切）り
と云ふと此（此）の（の）生（生）と云ふと討（討）きと云ふと者（者）の（の）淫（淫）者（者）と云ふと
す（す）と云ふと頓（頓）てと云ふと不（不）と云ふと新（新）へ（へ）終（終）と云ふと首（首）と云ふと
しと云ふと

橋（橋）慢（慢）の織（織）屋（屋）機（機）糸（糸）割（割）截（截）
京大（京大）と云ふと下（下）と云ふと賣（賣）下（下）町（町）丹（丹）後（後）と云ふと佐（佐）と云ふと

絹屋了して取りしおぬあしときぬや仲居より
にくし絹とりきぬどきく内法するや仲居
す座して丹後一人をほりーあ合でりー
多で買ひとりぬむ仲居乃者も却て候を
了追らまよせしむいしきお比佐系之
了ハ機三千四しちり所多時機のもろ老と嶋
と向りぬまよその聖朝より一機の系ゆま
切しき誰りまよが業とて事議しきれ尤文
證拠もあてていくのあまよ毎日く切らま

後了ハ廿四機あし切し一は松が許より口達宗
の上人事りてまよく又新清しきれ先師の渡
もろりりー切は初ハ天名を言しきれあろり
そし因波茶師の梅屋とまのて七日加持
もれば件の切しりまよぬぬ八日して新清候
もれば又切もあまろり人のまよく今度の候
やありふと皆矯慢のせまよりか災のりる
ま初め鶴のまよりーもろりり可愛客候
御方ーとまよりはまよめまよまよ

婦子あまをを総母の一向家と云ふあまの母
愛宕山より石味をよめてはつる目まで一人き
り
三願せしは災人なきまにやに
り

噴火炎とらば

大坂天海平目りあややあまの八日集致送を憐
みして噴火強盛の者うて人ゆぐりりり
下人をせよはふふのハ獄卒のあまなりしは是は
とふのまの丸炎名や山根を美くけりて也貞享

三日月すくく不家内の柱や多りしは在
上流るのそれよるまのひのふるあまの
ゆふまひあまきう下人丸穿徹りては
るのゆりくはてるあま五人あまを
あまもあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

豊食夫 澤より大なりて吠

南都の三条くしんまの
ありま婦おのりて豊食夫
ありま婦おのりて豊食夫

なつし負享ニは月未旬アリ 穢儀まりて益
せむしとやう 甚き怒りありぬれハ一日の内に
四つびきてまりしやど一度のいづへもせし
既言言よわきひりうな一夜の噂させと魚くそ
！一ふみのわうく罰くまけくあて逆と處や
し 穢儀ちんあまてしりーごはやが着ハ一冊
をひり穢してしーせんが許みて宿かりしうば
此者ハ後世の心の中はししとて種て修業しして
ははの焼うあし悔しちしと儀のいづへハ家の

主人の兄なりし夫婦ハ教道無慚の者少くつれ
今畜生なるやちらゆりしとつまば 姥はつておまね
しる勢をいりれを不意くおひひなばあしてあま
しつるまハ姥やどてあしとつらあもなかりしま
まがま由なき縁儀ハ物行り 驚異せしむ
はぶやまもれを今一庭あてあましく 淫と云れ
あしちりしんあひりーお又あしーと不思議や夫婦
より之言語通せししてまき 犬の吠る声し
あしあしきまきあしり 姥たどるき せりしに

ハ何代（百）はこれん 跡ももつてしこれたり
遠逝の人（きん）にすけく 毎夜門（ま）の（ま）を
すけりしとらん

非道姪暴親子夫婦

大坂上町の所々町（お）の（ま）の（ま）の（ま）の
隠居（いん）する僧（そう）の（ま）の（ま）の（ま）の
つれて夫婦（ふう）とつりし 後家（ご）が（ま）の（ま）の（ま）の
てつりし百容儀（ひやく）まごひ（ま）の（ま）の（ま）の
継父（けい）心（しん）せりし（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の

親（おや）と名の付（な）く人（ひと）の（ま）の（ま）の（ま）の
その（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
つりしおそれ家の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
しよ（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
お（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
毛（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
者（もの）やう（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
お（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
改（か）で遠（と）逝（し）ありし（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
空（くう）母（ぼ）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
女（に）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の
出（い）家（け）の（ま）の（ま）の（ま）の（ま）の

ややせし種ねるをうけて夫婦より首と削
 うき道頓堀の十日寺のあし晒きりし見物
 乃中より相も美女うらも口と吸屋しと云き
 ちの乞食とも巫すべしとありきし頓て
 那の者ゆめし公候了出しれど則籠
 余せしやくやけ吉が亥父も出家してかくし
 女と出まゝる姫有り空胸も親ハ出家して
 たりしと也海しに互乃因果の初ねし法し
 るしり下ヤと人と忌侍りし

劫盗遠く去遠之川に流るる
 元録元の京三條活染洗地以都筑地を築い
 の洗地を換りし給ふのりあく益ありし
 只いよく穿誦ありし給ハ質ヤにあり
 乃者強入にまゝ質入るるれすも物
 月代の代かしくしゆけりし人ハ何れも者
 ずんあつたしゆれもかきすして穿
 余せしゆらに休免の都及んや發し法あり

先づかゝりて越前のあつて山賊より山賊しきり
けり我ハ悪性ゆく親の勤者のて方のを新
るき由くし改せお海せくあの上ハくくの同類
りしりぬていふ望財も納得しそとれお
りしバ我館かて謙ひるり所ハ東面くはお極
どらしとすんお中ハ一人我吉の幸りて
公儀の決地とぬし日本あゝの澄初ハおひら
これ等のお極ハ余ハお海ぐきと自慢せし
あむ日の後道に者いしきおもあゝとすし
あ伊

のあさハ也どしおんし一おハおなりて
左もわしバ各のおくもあゝらんいさおし
バは後ゆかへしとて高よ上りまゆあま
右のどんく討へしは斜りくは鷹火し
まぬい越あよやせつりしれ悉くや西捕
黨ハ越あよて宰よし決地望ハ系取て
成敗せしきあし髪ゆしも對皮の上りて
わししとらり

鶏の毛取し下す

英法の西法蔵村の土屋長ちあはれ鳥籠のしぬ子と
好く喰ひつゝ然に悉くくちめて後籠乃
産毛一面よ生ししう寛文の比りし

此う鳥の嘴と生ず

江戸通銀町二町目と荒野とより高野あり

八郎山家の餅拾のみとよまよはしむるわが

くちり大獎者てくちめてはぬる死りしは後

して物驚くちりし判方少もくちす不思

のりよりの髪根とくちし一面くちるは

て差乃あくして所し延宝の比して人作し

殺生の現業無根の形くちる

上総國慶南乃妙覺寺門あし人数りし

るりしと或百姓十人くちりたを合ちりた

書をぬてしよまの久保田平ちあよのてくちる

けりしよ者くちるまを向し魚ハけりしん

えせまのてせし定むるまをくちり作りし土屋

と倡りき外とひるまが取目鼻口まのくちりて

形ち瓢箪のくちりその黒蛇くちる居る

これ其が父して所りし若き所より鳥也
細くもまほくゆり殺せしやん敷や儼
煩ひかく腹の地喰とせんとし瑞を
地くぶがれむ鳥れ籠いりり出て
了急して喰ひありとあり

楊枝咽入りもちまてす

寛文七子より越おれ断甚なありし人
朝の以けりて楊枝の舌よりまて
しあつり作の楊枝咽入り終る刻なり

いんはの臭物より術とひてま
魚河とゆりまぬり一節をまて
多くの臭の咽より行と撥り一
の終り也まぬりてくみきゆに
し行りし

貪嫉締りて放て却て死す

寛文元年江戸八町堀り
素とゆりて人の媒の虚言
の女ありし女隣の嫉よ
れよりゆりたまがて親のまへも

いさハ首せりて死すん我死すハ箱
今も二十餘りこれとあるすも又龍の
活せりて教してとては妹初め
此の邦の西行合とておさるし
しる令のよとてせりていさ
て教りてんとて天舟とて
おのてやしくはまの也
挿とてとてとてとてとてとて
おのり声とてとてとてとてとて

おのり妹ハ息とておのり
とてとてとてとてとてとて
うや頻り新証とてとてとて
の者なり今とてとてとて
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのり

犬少之去つやまひて娘と少報す

丹後多海の犬らちの久志入京後丹後与家の住ら
人より所付犬之報せし云ありしに庄とれ
東流しのもやせし水せのむ勢のしりもり
新よ下の幸とてしそや起出あるに月夜に
既がよしとて果報せしおしし娘の七歳
りのがあつたき新て水せのむやまきしうらに
既せすらとて丹後上り九もんとしり

送風家又貪嫉首とりしり

信州松本領の菜華とよふふとては者よりと
とこの土民熊走りし今穀物と一升か
ゆに二升よとて新灰とこれと家職として世に
了りあり老親の母ありあるが日暮大級邪見
の者少てはゆよ二升とほしりしうた山望の
窮民のありぬむはのそとつて借せの勢
よ習ひ誰りむ者もりてさしに延室の
細比とてありしお老姥の比ありて妙よ生
おとせ此家の所よりおたつありしお儀上

大凡^{たふん}のり^{のり}の口のち^ちと^と好^好の^の人^人の^の吹^吹也^也す^す忽^忽ち^ち
を^を火^火も^も澄^澄め^めを^を海^海へ^へき^きを^をて^てあ^あり^りし^しま^まく^く
周^{あつて}章^{あつて}少^{あつて}い^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}志^{あつて}づ^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}火^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}し^{あつて}る^{あつて}れ^{あつて}は^{あつて}
老^{あつて}媿^{あつて}の^{あつて}首^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}き^{あつて}脚^{あつて}を^{あつて}踏^{あつて}ぶ^{あつて}つ^{あつて}つ^{あつて}み^{あつて}し^{あつて}て^{あつて}進^{あつて}ず^{あつて}り^{あつて}海^{あつて}へ^{あつて}
ゆ^{あつて}を^{あつて}海^{あつて}へ^{あつて}き^{あつて}す^{あつて}る^{あつて}を^{あつて}ゆ^{あつて}く^{あつて}

賊^{あつて}夫^{あつて}鬼^{あつて}と^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}首^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}く^{あつて}

信^{あつて}州^{あつて}松^{あつて}平^{あつて}田^{あつて}村^{あつて}へ^{あつて}渡^{あつて}せ^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}高^{あつて}買^{あつて}農^{あつて}業^{あつて}匆^{あつて}
蕪^{あつて}等^{あつて}の^{あつて}つ^{あつて}が^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}し^{あつて}る^{あつて}も^{あつて}人^{あつて}を^{あつて}し^{あつて}て^{あつて}世^{あつて}を^{あつて}送^{あつて}り^{あつて}
し^{あつて}者^{あつて}あり^{あつて}目^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}る^{あつて}も^{あつて}世^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}る^{あつて}者^{あつて}と^{あつて}不^{あつて}慮^{あつて}

り^{あつて}ふ^{あつて}り^{あつて}い^{あつて}ひ^{あつて}ひ^{あつて}の^{あつて}こ^{あつて}の^{あつて}心^{あつて}を^{あつて}付^{あつて}せ^{あつて}る^{あつて}れ^{あつて}ば^{あつて}又^{あつて}交^{あつて}て^{あつて}田^{あつて}畠^{あつて}
と^{あつて}思^{あつて}ひ^{あつて}も^{あつて}穀^{あつて}を^{あつて}雜^{あつて}め^{あつて}て^{あつて}掠^{あつて}め^{あつて}奪^{あつて}て^{あつて}朝^{あつて}夕^{あつて}の^{あつて}い^{あつて}ふ^{あつて}を^{あつて}
よ^{あつて}り^{あつて}し^{あつて}て^{あつて}ぐ^{あつて}る^{あつて}は^{あつて}の^{あつて}村^{あつて}の^{あつて}者^{あつて}甚^{あつて}だ^{あつて}い^{あつて}ふ^{あつて}を^{あつて}送^{あつて}り^{あつて}
ま^{あつて}ふ^{あつて}と^{あつて}遠^{あつて}敷^{あつて}し^{あつて}る^{あつて}れ^{あつて}は^{あつて}一^{あつて}里^{あつて}づ^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}隔^{あつて}る^{あつて}を^{あつて}河^{あつて}と^{あつて}
り^{あつて}ふ^{あつて}り^{あつて}の^{あつて}店^{あつて}を^{あつて}ま^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}作^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}候^{あつて}せ^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}あ^{あつて}ら^{あつて}か^{あつて}ら^{あつて}
り^{あつて}の^{あつて}時^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}て^{あつて}び^{あつて}く^{あつて}し^{あつて}て^{あつて}候^{あつて}を^{あつて}後^{あつて}村^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}
し^{あつて}る^{あつて}色^{あつて}も^{あつて}り^{あつて}よ^{あつて}け^{あつて}者^{あつて}も^{あつて}あ^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}作^{あつて}り^{あつて}て^{あつて}候^{あつて}
ら^{あつて}ぐ^{あつて}る^{あつて}首^{あつて}を^{あつて}始^{あつて}め^{あつて}て^{あつて}脚^{あつて}を^{あつて}踏^{あつて}ぶ^{あつて}つ^{あつて}つ^{あつて}み^{あつて}し^{あつて}て^{あつて}進^{あつて}ず^{あつて}り^{あつて}海^{あつて}へ^{あつて}
ゆ^{あつて}を^{あつて}海^{あつて}へ^{あつて}き^{あつて}す^{あつて}る^{あつて}を^{あつて}ゆ^{あつて}く^{あつて}

産婦恩せつれ然のふに害さるる
江州甲賀郡の山中へて何れ女産丹よまの
切きよぶるにふとの物と懸る名ありしよ
て吾もつて然きりて女と名官よひききん
ふと産しじ一七日さして置るゆりしきん
つハ然るるづらよ候てまやぐりし十安
とよ移へると然の玉取りし物しよ
始ハ云ひしと流くしよすかきりし女
移へてはきりし然の居取りし物しよ

件せんの然ぜん官くわんよりとつ多おほ女むすめとすくしよ
りし物しよ
とよ移へると然の玉取りし物しよ
始ハ云ひしと流くしよすかきりし女
移へてはきりし然の居取りし物しよ

梅うめ吉きちと糸いとの積つみ悪あく

大坂聚あつ不ふ町ちやうと梅うめ吉きちと糸いとと云いふの胡こ椒わし皮わだかま中なかつと
しよめと始はじめてはまじりし大坂中
の梅うめ吉きちと糸いとと云いふの胡こ椒わし皮わだかま中なかつと
しよめと始はじめてはまじりし大坂中
の梅うめ吉きちと糸いとと云いふの胡こ椒わし皮わだかま中なかつと
しよめと始はじめてはまじりし大坂中
の梅うめ吉きちと糸いとと云いふの胡こ椒わし皮わだかま中なかつと

丁銀板ちやうぎんいたとあきりし子銀こぎんより今いま一夜いちや

るせよとして丁銀とよよりのちおのばすりやの
り神愛とひしあきやぶらにあま度あれよ
けのらり一割てと名と板の吉と来とて思
まの博奕のりにつき、牢舎せし元禄二
年正月十日の大赦了獄と出してそれより
天正寺や久奈久寺長者長吉今も百両のりや
何とてあつさりん達とて長吉や年々
それよりあつさり親業のりや度より
うりよりあつさり一いふ業よりして譲り

長吉や神の大切の用よりあれを冬よりけし
きよりお母の誰とて問まのちあれの者して親
とハハ義するりり當化よ久く候てそとハ
親とえあつさり親のり見あつさり是れ業
あつさり親恨とちんと云あれがあつさり
あつさり長吉がりやしりあつさり長吉が妻に
少むあつさりあつさり博奕の上よあ書し
せしあつさり長吉がりしりあつさり藩國を
あつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あやと吉と兼持し報してさう隣の者壁の破し
うらまうやうひをねむみ服袴の血を何ふりし
のお指やのまこつまゆ合家と云ふなりくから
あつたの御守のりやふんこつたつまの夫婦
うらまうの毒おちる何位所せると名どつた
吉と兼持の命を奪ひ新地堂へおつて
宗とせんとして借毫し用意せし比少梅
弟三たあいつらおふと妻と離あつたり
地の女天をさうしてあつて長吉の梅
あつた

吉と兼持し報して骸ハ三たあ捨し
書ししうば頼て公儀へ新ししお身同
とつた新地つはつりしあつた吉と兼持ハ新
曲輪へあつたおの口のあつしお大出
吉と兼持と挿少梅三たあつたあ相持屋と云ふ
しおお借やのあつたのあつたあつたあつた
義あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
古井とつたあつたあつたあつたあつたあつた

是も愛せむありし金の由穿鑿作りしめ交をせ
八十あるなりしと一扱科極して吉東ハ磔
やと條の三人ハ大坂進致作りしめと伝ちあり
古より於くざれ君よりして訴人ありて首を削
らまし一少秋ハ世のち子殺しとて一磔
やと

狐の耳口とまきと根闕の子と産
勢州日永村乃古名ありといふ者狐とて一
白の親の忌日なりとて脚ありて産とて一
やと

者我よりまきりて切て耳と口とを赤くして教
しあり其の比を三身ハ妻産とせしに女子の
取ら多口ゆとて産し一寛文十二年の
鷹の羽毛とぬきとらも子と産
尾州勢田ちりき山崎村の者鷹と籠に入
しぬ丈他出の所を少て鷹の籠とぬきとら
妻より入て憎きやゆとてぬとぬき肩骨計
らりしとてしぬの女産とて産し一に肩骨ハ
つらとてぬきとらとて産し

野馬三竹口毒と害す

野馬の野馬三竹と云ふ儒醫乃る名世に於て
し人ありしが悪疾癘病有りて憫む所の者
と云ふ所ののふも虚鼻毛くらぶらたの事
あやうらぐと敷へくと顔出と毛の怒りに
大なる声して叱らき有りし後京都よりて
おのの小姓と仰の悪口少く叱らきもれと
そお教経巻よて即世よ三竹と仰一報し
おとせし世らへの顔病と誤名をせとましと也

非理の牛とつひ接触と云ふは

京荒神河原の牛屋に大なる牛は、野馬と云ふに
牛のひるひはひらりありに、おのの良、おのの悪、
廟りせりと云ふ人ひらりて、彼へは、や、で、お、う、と
ゆり、う、べ、一、今、一、度、ゆ、き、て、問、屋、ま、を、お、し、と
お、て、ま、れ、う、と、し、お、ま、は、牧、童、牛、よ、じ、ひ、か、く、る、と
お、れ、は、是、非、を、お、ま、り、お、ま、り、い、は、し、ま、し、お、ま、り、
ゆ、き、件、の、帖、を、お、ま、り、お、ま、り、お、ま、り、お、ま、り、
牛、大、く、荒、い、ら、す、お、ま、り、お、ま、り、お、ま、り、お、ま、り、

昔よりいれども人々...
世のまじり飛出ても人々...
ししてぞん

不孝の男士...
和州高市郡島ヤ...
母不孝なりし...
母系と...
つゆ...
て釜...
て釜...
て釜...

つりし茶と...
悪心...
海...
走り出...
又...
て葬...
つゆ大...
云もあ...
し...
し...

月しに成の付らるる小室とまきしははるまよ
云しに又洪水より来り雷いづはるるあり
すはゆしりしと待もやしてはやくと待
たきり火とやあざりしは聖明灰のせよと
ゆきするよ炭のしらのあましくしては
起りくを居ししや又人々の毛のし
積たよと積てやしくぬ二思て灰と
ありとらうん

他財と換死しと後自害して成す

尾張町一町目さうやふと来とりの者
ひよ金七千両の全盡とてぬるるを聖の酒乃
ゆの大吹ふつと停止の位せし
これ究竟の幸なりとて件の金と換掠し
とまきで本手よりして千両の富貴と
災室八家の八朔の礼と法とめ
あつてさへへおそれ一階又
人の財室とさうひりしと今懺悔する
まきく呼て左右の腰腹と

返しきりてくはらふき傍て刀さひきり
しりし疵きあつて八九日して死す

貪賤の嫁娘類族刑とらふじ

京油少海の賀部屋壽幸といふ者賤富家
げんざうして嫡子よ嫁とせしむに嫁の粒ひ
飲して金二百ありちまひしとて後英方う
合ふるおまへりといふ人のありしてやて是の
てやと又りせしうけ壽幸ハ大欲無厭の心
まをりしうは頼てはあといふとんと謀て

しそやの婚れのみと究めやまじしとて此今の嫁の
二百あやみらんりの流石よ情ありては嫁乃
乳母と下男とやまはきけりて嫁に
衣の無名をまてよたも何とバとしく小塵
美やゆせんといふやと云合ふれば皆
うな鄙き本性のうしむれん纒の款ふん
ひらきの後の災やも又まはれん状あり
本中君の女までやまこれ流くにあし合せし
何の附乳母嫁の形とやむりやきて下男の

そんが武彦燈の尾花の末乃穂よ出て望み
とめまじしや一何のまゝらめも痛りしを
ゆふ一衣二衣のぢぢいハ誰のちもやうき
女ハ只飛騨やまきよ男のぢぢいあしよハ
ま世おと流しくはゆへと笑の中に計で合
意くくくふびもれハ嫁ハ教と何れめ何
思いよすのさるまきや自作抱きやま
し昔ハ只一すに夫のぢぢい心礼一
りやと教し小今何れよよらまは及
ぬ

ゆ云るぢぢいまきしハ割ハせよまま世ハ
ふぢぢいも不我のうき名ハ儀す何れき
しぬ美哉ゆよハ男志のびまの隙と
ま色やかしてのま境なれハ女も足まが
み角と告に何れりく嫁が不我也と
勢て飯しる親ねるき意趣と
邪の求め頓て御まめ板金同防ち
しろだ乳母と下男とを拷問よう
五のまに白状しられバ則壽幸夫婦
嬌子

乳母下男腰のや中君の女まであらず都力
上中下といき口く一礎よりひきぬり一室ハ
嗣取一賤室ハおろろく彼嫁と賜一之也
父と執一属滅す

尾州清水系系とよ者の子と以て系ハ小比叟
万娘と書にむふんとりしと親とにじめ
一族口とと海へ無用と云くかど又よ用るる
らくこびん一まく急く不和ふるり一親系も
中河一きものむれハ夫婦心と合せ朝夕の食外

自ハ美味と嗜みて親ハ下人よいし一もせ
父も堪忍とくかしてやけ悪人ハ世土の足ざ
しみせんとおひひそかよ新情とあうめ一と
夫婦のそのありて舅の悪妻とお強して竊
り父と執一あり源くざくすと一も皇天
覆る九バ一教め者やつと争と以て系ハ強腕と
きくせ世間へハ自害と披露一高岳院了
おろろ一と修めらうらるるの楚忽よはるし
寺社より取入るりしは則檢使奉り

自害^{じがい}すハ何^{なに}とす^すと^と會^{かい}義^ぎ定^{じやう}一^{いつ}身^{みん}も^も同^{どう}心^{しん}
し^しく^くく^くの^の何^{なに}と^とれ^れて^て想^{しやう}妻^{さい}父^ふ子^しと^と都^と尾^び内^{ない}區^くと
成^{なり}願^{げん}吉^{きち}左^さの^の子^しと^と志^しづ^づく^く成^{なり}願^{げん}も^もも^もの^の
子^しの^の侍^{しやう}子^しに^にの^のま^まき^きり^りぶ^ぶま^まの^の何^{なに}と^とす^すと^とし^し様^{やう}多^たり^り
位^ゐて^て前^{まへ}を^を別^{わか}れ^れさせ^せて^て此^{こゝ}を^を妻^{さい}ハ^ハ七^{なな}忌^きの^の日^ひに^にあ^あり^り
磔^{はりつけ}す^す何^{なに}と^とせ^せて^て此^{こゝ}を^を成^{なり}願^{げん}も^もも^もの^の二^に磔^{はりつけ}す^す
何^{なに}と^とせ^せて^て此^{こゝ}を^を成^{なり}願^{げん}も^もも^もの^の高^{たか}岳^{がく}院^{いん}と^とし^して^て
寺^{てら}ふ^ふ入^いり^りし^し尸^{しかばね}と^と出^でて^て入^いり^りの^の叶^かは^はり^りの^の法^{はふ}式^{しき}と^と
強^{つよ}て^て祈^{いのり}へ^へら^らま^まし^して^ては^はま^まに^に逃^{にげ}き^きろ^ろと^とし^して^て九^く洲^{しゅう}門^{もん}

の^の及^{およ}ハ^ハ何^{なに}も^も何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^と
一^{いつ}族^{ぞく}の^のや^やん^んく^く何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^と
二^に腹^{はら}ま^まき^きろ^ろと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^と
何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^とし^して^て何^{なに}と^とす^すと^と



